

た。「清浄行」とは、正しく煩惱の穢れを断ち切つて清浄なる仏国土を莊嚴するための行であり、それはそのまま一切衆生の煩惱を転じて菩提と成す「救済の行」となるのである。

「四十八の誓願」については、一切衆生を平等に救済することとに集約されるが、法蔵自身の光明・寿命を成就する願、国土を清浄に莊嚴する願、国土の菩薩を教化地に至らせる願など、衆生済度に関する具体的な願行が、段階的に四十八へと展開される。そうであるから、そのすべての願が成満されるところに「浄土」は莊嚴され、同時に一切の衆生が救われていく他力の仏道も完成するのである。

もとより、衆生済度の眼目は「拔苦与楽」である。四十八願では、第一に「無量寿仏の国に地獄・餓鬼・畜生の三惡道がない」こと、第二に「再び三惡道に更さない」ことが誓われ、その「拔苦」の内容が具体的に示されているのであるが、これは、被救済者の住む世界（穢土）に三惡道の苦があり、現に三惡道を廻つて苦しんでいる衆生がいるから、その三惡道の原因を断ち、輪廻から解脱させようとするものである。

救済の根本をなすこれらの衆生利益は、往生後の果報として得られる利益とされているため、その功德を無量寿仏の国土にみていくことができる。無量寿仏の国土は、因位の法蔵が清浄なる願を発し、「清浄行」を撰取して、その願行成就の上に莊嚴される「浄土」であるから、国土は清浄にして煩惱の穢れなく、どこまでも我執や差別を離れて、苦しみを生起させることがないのである。反対に、煩惱の尽きない穢土では、我執や差別を離れることがなく、常に苦しみが続かない世界となるのである。

無量寿仏の国土が清浄に莊嚴されることで、他方世界の不浄性が明らかにになり、その不浄なことで生起される様々な「穢土の諸問題」が浮き彫りにされてくる。これは正しく浄土の光明功德によるところであつて、浄土そのものが他方の世界を照らし、衆生の罪悪性や愚痴性を明らかにするのである。衆生の煩惱を滅するためには莊嚴される浄土は、常に智慧の光明として穢土を照らし、衆生を利益せんと用きかけているのである。

ここに「浄土」が、実体として存在する固定的な世界ではなく、常に穢土の衆生を照らして利益する「光明世界」（智慧のはたらき）であり、無量寿仏の衆生済度に必要不可欠な「救済の場」として莊嚴されることが明らかにしたのである。

吉蔵の法華經疏における仏身論

—— 寿量品の解釈を中心として ——

藤 野 泰 二

本稿は、嘉祥大師吉蔵（五四九―六二三）の仏身論について、『妙法蓮華經』「如来寿量品第十六」に対する注釈文を主として、「寿量品」において明らかにされるといふ仏身の常住が、吉蔵においてどのように理解されていたかについて考察したものである。

吉蔵は三身説の名称として『撰大乘論』（世親釈・真諦訳）の法身・応身・化身の三身の語を採用しているが、このうち応身に対する捉え方に異なりがあり、応身をどのように解釈する

かが問題となる。ただ、吉蔵自身の見解は、各種の説はあつてもその真意は一つであるとするものである。吉蔵においては、さまざまな仏身論の異なりは本迹の開き方の差でしかないのである。それは、衆生の執着を破するためにあるのだとする。諸経論の仏身論の差異は、衆生のさまざまな迷い方への対処法なのであり、決してある一つの説が正しく、他は間違っているとは考えていないのである。

吉蔵は『法華義疏』巻第十において、「寿命品」を高く評価しており、『法華経』の講説者は「寿命品」の真意を探索しなければならぬと強調している。『法華義疏』には吉蔵の三身説の説明として、「内応身・外応身」が出てきている。この説は『法華玄論』には見られず、吉蔵の他の著作では『法華遊意』・『法華統略』・『勝鬘宝窟』に説かれており、吉蔵の仏身論の特徴とされる説で「報身即是應身。應身有二。一者内應謂與法身相應。是故經云。諸佛所師所謂法也。以法常故諸佛亦常。二者外應謂與大機性相應故爲大菩薩於淨土中成佛。内應即實非權。外應謂權而非實。故云亦權亦實。」(T34, 603b)とある。法身は常住、化身は無常、応身(報身)は内応身と外応身に分けられ、内応身は常住、外応身は無常なものである。応身(報身)は常住であり無常であるものとする。

三身は三句または四句によって分類されて説明されているが、それはあくまで衆生の執着を破すためのものなのであつて、法身は常住であると言つた場合も、法身という実体的なものが現に存在しているというわけではないのである。吉蔵の考える法身(実相)とは、現実世界を超越した理念の実在なので

はなく、その現実がそのまま法身(実相)としてある、ということなのである。よつて、三界とは法身というはたらきそのものである。今のわが身がそのまま法身なのであるとするものである。

吉蔵は『法華統略』においても、法身が四句を絶したものであることを強調している。法身は四絶であるからこそ、この世界に満ちることができ、応身も化身ともに法身であるとされるのである。三界に現れているすべてのものは法身なのである。それを衆生は執着を起こし、自ら分別して別のものとして捉えているにすぎないのである。応身も化身ともに法身なのであり、真実には法身だけが常住なるものではない。法身の現れであるということから見れば、応身も化身も常住なるものである。このような仏の不思議な力が秘密神通之力であり、甚深微妙法なのである。

吉蔵における常住とは、法身という常住なる存在が存在しているということではない。吉蔵の考える法身とは現実性を離れないものであり、この世界を成立させるはたらきとして、さまざまな形を取つて現れ出ているのである。よつて、応身(報身)も化身もその一部であり、衆生の教化を行いつづけるという形で、法身として現れていると言えるのである。ただ、衆生は執着を起こし、わが身(無常)と法身(常住)とを分別して捉え、法身を求めようとするが、それはすでに二見を生じてしまつていたのであり、真実にはそのような差別はない。常住である法身が無常である三界という形で現れつづけているということ、これが吉蔵の言うところの「法身常住」の意味である。